

～ セピア色の風景 ～

「かごんま」

青田 茂雄

仙台建設業協会専務理事

かごんま。うまく説明できないので、相馬方言辞典より引く。「結婚披露宴で、新郎新婦入場の際にお先乗りが触れ回る事あるいは人」とある。

9歳違いの長姉が嫁いだのが、私が小学校4、5年生のころだった。自宅で冠婚葬祭の全てをやっていた最後の時代だ。私は4人兄弟。女、女、男、男、私が末っ子。事実、次姉以下全員が宴会場で結婚式・披露宴を挙げている。

その長姉の式・宴は、花婿と両親、親戚代表1名が祝い酒を持ち、わが家の正門を通って迎えに来て、まず自宅で行う。当然、客のほとんどが嫁側の人。座敷で床の間を背に新郎新婦が座り、♪高砂やのの謡曲の下、親戚の女兒が花婿に男児が花嫁に酒を注ぎ、三々九度の杯を交わす。間をおいて花嫁の兄弟の紹介があった。兄弟はお膳のある席に座っているわけでもなく、その時になつて呼ばれた。私も神妙に、

緊張しながらよく状況が分からず末席に正座した。長姉が明日からいなくなるのを実感できていなかった。

宴早々に、花嫁花婿、仲人夫婦、花婿の両親、親戚代表1名が嫁ぎ先に移動する。今度はわが家側から行くのが、両親と親戚代表1名。わが家は、主賓がいなくなつてから宴たけなわとなつた。近所のお手伝いお母さんたちが、真つ白な割烹前掛けをして、忙しく立ち回つた。

かごんまは、嫁ぎ先に向かう一団の先頭をきつた。

思えば両親、祖父母が結婚式の招待客を相談し始めたころ、かごんま候補者も選定している様子をうつすら覚えていた。総じて3、4人。親類縁者、実績があること、酒に強いこと、元気で場もちがいいことだったようだ。かごんまもいろいろで、酒が入ればの人と、酒が入らないとの人の組み合わせとなる。当然、花嫁の披

露宴前から酒をごちそうになり、絶好調で乗り込むことになる。花婿宅のじょうぐち（相馬語Ⅱ公道から母屋の玄関まで、もしくは敷地の入口から母屋の玄関まで）を、踊り跳ねながら。そして、嫁ぎ先での結婚披露宴が延々と続いた。

長姉二十歳そこそこで、親が決めた結婚。つきあい始めのぎこちないころ（だったと思う）、クルマ（わが家の普通トラック）でお出掛けする2人の真ん中に、なぜか私はよく座っていた。美味しいものを買ってもらふことだけが楽しみで……。後年その思い出を話すと、照れ笑いしていた姉夫婦。かわいがってくれた義兄は、過日姉を置いて鬼籍に入った。

●あおた・しげお 1956年生まれ。福島県相馬市出身。2016年5月から仙台建設業協会の専務理事を務める